

安保 雅博 (監), 原 寛美, 高橋 忠志 (編)

エビデンスに基づくボツリヌス治療 上肢・下肢痙縮に対するリハビリテーションの 最適化のために

田 口 健 介

(東京慈恵会医科大学附属柏病院, 作業療法士)



ボツリヌス治療のエキスパート
が著した上肢・下肢痙縮へ立ち
向かう臨床家のための新たなバ
イブル

「上肢・下肢痙縮に対するリハ
ビリテーションの最適化のため
に」, これは本書のサブタイトル
ですが, 読者が本書へ期待するこ
とを言い表した, まさに最適な表
現であると思います。「痙縮」は疼
痛や関節拘縮, ADL 能力低下等
を引き起こす上位ニューロン障害
の一つであり, 多くの患者と臨床
家を悩ませてきました。そのよう
な中, 2010 年 (平成 22 年) 10 月
に脳卒中等の中枢神経疾患発症後
の上肢・下肢痙縮に対する A 型ボ
ツリヌス毒素製剤投与が保険適用
となり, 今日では欠かすことがで
きない治療選択の一つとなってい
ます。しかし, ボツリヌス毒素製
剤投与によるボツリヌス治療が,
作業療法や理学療法等のリハビリ
テーション医療を併用することで
効果を最大限に発揮することや,
その具体的な実践方法については,
まだすべての臨床家に十分に周知
されているとは言い難い状況で
す。そのような現状において, 本
書は「上肢・下肢痙縮に対する最
適なりハビリテーションとは」と
いう問いの答えを見いだす手がかり
になります。

本書はわが国の痙縮に対するリ
ハビリテーション医療を牽引され
てきた安保雅博氏, 原 寛美氏, 高
橋忠志氏が監修・編集を行い, そ
の他にも多くのボツリヌス治療の
エキスパートが執筆にかかわって
います。本編は上肢・下肢痙縮治
療にかかわるすべての臨床家に有

益な内容ですが, 私は次のような
ニーズをもたれた方々に特に推薦
したいと思います。

【ボツリヌス毒素製剤や痙縮の 基礎, ボツリヌス治療の戦略を 知りたい】

「第 1 章 痙縮とボツリヌス治
療の基礎」, 「第 2 章 ボツリヌス
療法を行う前に知っておきたい知
識」, 「第 3 章 ボツリヌス治療と
リハビリテーション」では, ボツ
リヌス治療の効果機序や最新のエ
ビデンスを確認することができま
す。その中でも「第 2 章」では,
「関節可動域制限のメカニズム」や
「装具療法」, 「経頭蓋磁気刺激療
法 (rTMS)」, 「歩行のバイオメカ
ニクス」等, ボツリヌス治療の実
践に不可欠な知見が豊富に解説さ
れており, 治療戦略立案において
重要です。

【効果的なボツリヌス療法を知 りたい】

ボツリヌス毒素製剤注射は, リ
ハビリテーション科医師が施行す
る preconditioning であり, 作業
療法や理学療法と併用した「ボツ
リヌス療法」としてこれまで多く
の治療実績を蓄積してきました。
「第 4 章 下肢に対するボツリヌ
ス療法」, 「第 5 章 上肢に対する
ボツリヌス療法」では, 最前線で
活躍されている執筆者の具体的な
実践内容が紹介されています。そ
れぞれに共通していることは, 最
新のエビデンスを前提に, 臨床家
の暗黙知になりがちな訓練内容を
形式知となるように解説している
ことです。筋電図, エコー, 上肢
機能評価等の客観的な評価に基づ
き, 装具療法や電気刺激療法, 課

題指向型訓練等, 訓練選択をする
過程が明確に示されています。こ
れらは, それぞれの読者の治療
リーズニングをよりよいものへ向
上できると思われます。

【地域やチームで痙縮治療を実 践したい】

「第 6 章 ボツリヌス治療と介
護負担軽減」では, これまで必要
性を感じながらも報告が少なかつ
た地域医療や介護領域でのボツ
リヌス治療の実際が紹介されてい
ます。介護負担軽減の戦略として
は, 痙縮による開排制限の改善や
手指の衛生管理方法が解説されて
います。また「地域の痙縮患者を
救うプロジェクト—J-BAT-
TERY seminar」(コラム掲載)で
は, ボツリヌス治療をチームで取
り組む必要性や, 医療機関と地域
の臨床家が協力する実際の様子が
報告されており, とても貴重であ
ると思われました。

私は, 本書を読み, 最新のエビ
デンスや執筆者たちの説得力のある
実践報告に触れたことで, 上
肢・下肢痙縮に対する現状での最
適なりハビリテーションのビジョ
ンが明確になり, また新たな展開
を迎えつつあることに気づくこと
ができました。本書が痙縮克服に
立ち向かう多くの臨床家をさらなる
成長へ導き, 次の突破口へ前
進させる一冊となることを願って
おります。

B5 判 256 頁 4,800 円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357